

## 無題

眩いばかりに白くきらめく海面は  
あくまで穏やかな表情をして  
潮はちょうど止まっているらしい

(祈りとは、この雲母のようなもの)

ひたひたと涙をなめる透き通った水を通して  
反射を失い、ひとつずつ映し出される  
万華鏡のようにつやつやとした淡い色彩

質量のない、美しさという粒子の雲が  
碧い波紋の記憶を薄らいだものとしてゆき  
無感覚な奥行きへと還元する

(単なる関数記号としての「わたし」)

「汚らわしい欲望から遠ざかること——」  
かつて大いなる箴言が記された碑の前で  
交尾し、互いの美しさに打ち震える者たち

借り物の肉体を脱いだ者たちよ  
その生命の望み行く先を見よ

長い年月を過ごすということ  
ただそれだけであるということ

足元にうち顛える草  
その株元に身を寄せる砂粒

無数の微小な破裂音の集合体と共に  
打ち寄せる白い泡の列は黒い砂の中へ消え  
私は意識を取り戻す

(2014.5.6)